

大東文化大学 東洋研究所所報

2013.12 No.60

目次

ライデン大学における中国学、日本学研究の歴史、その他 ……………小林 春樹 ……1	
公開講座 「アジアの民族と文化」	
第1回講座概要……………小林 春樹 ……3	
第2回講座概要……………宮瀧 交二 ……4	
第3回講座概要……………滝口 明子 ……5	

[研究員の著書紹介・翻訳書紹介・基調講演]	
岡倉登志 著『曾祖父覚三 岡倉天心の実像』 ……6	
岡倉登志他編『岡倉天心 思想と行動』 ……6	
SP プロデュース編 『知らなかった! もっと知りたい、大安寺』 ……6	
東洋研究所刊行物……………7	
新刊案内 ……………8	

ライデン大学における中国学、日本学研究の歴史、その他

東洋研究所准教授 小林 春樹

2013年4月から9月までの半年間、大東文化大学の海外留学生派遣制度によってオランダのライデン大学に留学させて戴いた。

中国史を専門とする筆者がライデン大学を留学先とした理由は、第一に、同大学が19世紀以来、ヨーロッパにおける日本学と中国学の一大拠点でありつづけていること、第二には、ヨーロッパという「外の世界」におけるアジア研究、とりわけ中国学の歴史と現状を知ることによって、地理的にも学界的にも日本と中国という限られた範囲でおこなってきたこれまでの自分の研究の在り方を自省したいと考えたこと、の二点にある。

日本の文物をライデンに招来したシーボルト(P.F.B.von Siebold; 1796-1866)の助手としてライデンにやってきて、ライデン大学初代の日本語と中国語の教授に就任するとともに、日本語の文法書(“Japansche Spraakleer”, 1864)や没後になるが日蘭辞典(“Japansch-Nederlandsch woodenboek”, 1881)の刊行によって、ある意味ではシーボルト以上にライデン大学の日本学成立に貢献したホフマン(J.J.Hoffmann; 1805-1878)。その弟子で、9才の少年のときから、ホフマンによる中国語と中国の古典文の個人教授をうけ、長じてライデン大学で本格的に中国語を学んで、中国語=オランダ語辞典(“Nederlandsch-Chinees woodenboek / 荷華文語類参”, 1886)を編纂したスプレーヘル



写真1

East Asian Library (中国学・日本学・韓国朝鮮学科研究棟)

(Gustaaf Schlegel; 1840-1903)。そのスプレーヘルの高弟であり、中国の宗教文化に関する未完の大著、『中国の宗教制度』(“The Religious System of China; Its ancient forms, evolution, history and present aspect. manners, customs and social institutions connected therewith”, 1892-1910)を刊行してライデン大学の中国学を学問の名にし負う高みに引きあげたデ・フロート(J.J.M.de Groot; 1854-1921)。さらにその弟子で、中国と中国学を学んだのちに、日本語と日本学の学統が途絶えることを危惧した師のデ・フロートの意向にしたがってあらためて日本研究に専念し、『古代日本の仏

教』(“Ancient Buddhism in Japan”, 1935) によって日本の宗教研究の泰斗となったデ・フィッセル (M.W.de Visser; 1876-1930)。さらには、オランダ領東インドの支配に不可欠であった中国語通訳の養成機関という、設立当初からの世俗的性格を払拭しきれないでいたライデン大学の中国学科を、オランダ政府や植民地省などの影響から解放することによって真に学問の府たらしめた功労者、ダイフェンダック (Jan Julius Duyvendak; 1889-1954)。そして、全 20 巻から成る『万葉集』全歌の訳注書である “The Manyosu” (1929-1963) と、枕詞や種々の事項に関する辞典をも編纂、刊行したうえで、古代日本語の文法の研究を志したピエールソン (Jan Lodewijk Pierson; 1893-1979)。

それら、錚々たる中国学、日本学の泰斗の旧蔵書と手稿を保管しているライデン大学の East Asian Library を自由に利用することを許されて、筆者はあたかも 19 世紀から 20 世紀中葉のライデン大学にタイムスリップしたような錯覚にとらわれつつ、短期間とはいえ至福とも言うべき充実した留學生活をおくることができた。



写真2

同内部 (昔、武器庫兼厩舎 = arsenaal であったために馬の調教が行われていた。調教場は現在、広いラウンジになっている。

これはひとえに、日本に於いて各機関に筆者をご紹介くださった方々のご恩によるものであることは当然ながら、渡航前には一面識も無かったにもかかわらず、種々のご教示を与えて下さった江沢アヤ、I. スミツ (Ivo Smits) 両教授、そして学問的のみならず、当初は「さまよえるオランダ [の日本] 人」ともいふべき状態にあった筆者に対して、あらゆる面でのご教示、ご支援を惜しまれなかった國森正文教授 (日本語教育)、ならびに W.J. ボート (Willem Jan Boot) 教授 (江戸時代の儒教史)、

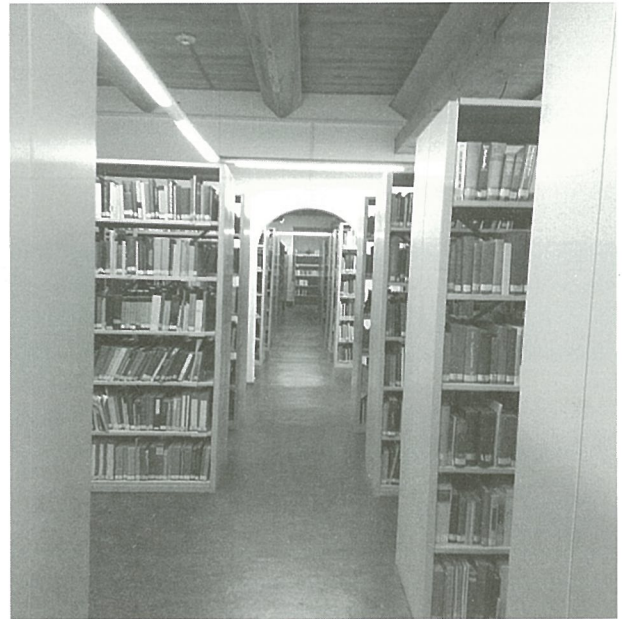


写真3

新刊の中国書の書架 (3階) と旧蔵書の書架 (1階)

さらにはライデン大学のチュルヒャー教授 (Erich Zürcher; 1928-2008) のもとで日本と中国の仏教史、とくに尼僧史の研究をされたヴァレンチナ・ゲオルギーヴァ (Valentina Georgieva) 博士のご恩の賜 (純粋な意味における「恩賜」) に他ならない。

還暦を過ぎた人生の黄昏に、異国において様々な方々から、文字通り「有り難い」ご恩を蒙ったこと、その結果、生来ペシミスティックな人間であった筆者が、「性善説」的な人間観に若干接近し得たこと。それこそが今回の留学の内面的な、したがって最大の成果であったと、レンブラントがその少年期を過ごし、筆者も半年の留學生活を送った “Neeltje van Zuytb-rouckhof (レンブラントの生母の名前でもある)” の寓居の庭から見えたオランダの美しい空と雲を想い出しながら考えている今日この頃である。

公開講座「アジアの民族と文化」

2013年度（第29回）東洋研究所公開講座は、「アジアの民族と文化」を統一テーマに下記の通り開催された。受講者総数は延べ82名（一般71名、教職員11名）で、各講座の概要は以下のとおりである。なお、長年ご出席いただいた方に対して行っている表彰状の授与は、今年はその該当者はなかった。

◇第1回 11月7日（木）13：00～15：00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

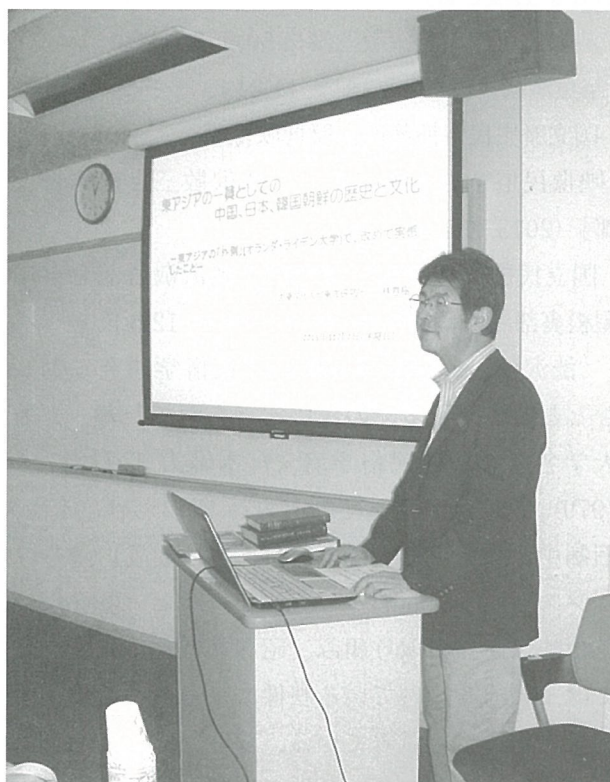
テーマ：東アジアの一員としての中国、日本、韓国朝鮮の歴史と文化

～東アジアの「外」（オランダ）で改めて実感したこと～

講師：小林 春樹（東洋研究所准教授）

ライデン大学は、1576年創立の、オランダ最古の大学であるとともに、シーボルトコレクションを核として形成された日本学、および、多数の中国系住民が居住する旧オランダ領東インド（現インドネシア）支配に不可欠であったオランダ人の中国語通訳官養成に端を発する中国学が盛んなことでも著名な大学である。本講演ではライデン大学の中国学、日本学について以下の諸点を中心に紹介した。

1. 日蘭辞典や日本語の文法書を著した J.J.Hoffmann (1805-1878) と、その弟子で、華蘭辞典（中国語—オランダ語辞典）を編纂した G.Schlegel (1840-1903) によって語学的基礎が固められたこと。
2. Schlegel の高弟、J.J.M.de Groot (1854-1903) と、その弟子である M.W. de Visser (1876-1930) の両者によって、中国と日本それぞれの宗教とそれに関連する文化、思想史的研究がおこなわれ、その結果ライデン大学の中国学、日本学は、欧米における斯学の中心としての学問的水準を獲得したこと。
3. ライデン大学の東アジア研究は、中日両国とその文化、思想に優劣をつけず、あたかも車の両輪のごとく両者を密接不可分のもの見なして研究してきた点にその特色が求められる。その点、明治以来の中国大陸への侵出と呼応して成立、発展してきた。したがってその根柢に中国、さらには朝鮮を、いち早く欧米化に成功した「近代国家日本」よりも遅れ、且つ劣った存在と見なす視点を有していた日本の東洋学、東洋史、さらには歴史教育とは異なる性格と特色を有している。以上である。



◇第2回 11月14(木) 13:00～15:00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：民俗学者・宮本馨太郎とその映像記録—台湾高雄・パイワン族の暮らし（昭和12年撮影）—

講師：宮瀧 交二（東洋研究所兼担研究員，大東文化大学准教授）

本年は、日銀総裁・大蔵大臣を歴任する傍ら、民俗学研究所・アチックミュージアムと主宰し、日本民俗学の確立に寄与するとともに多くの民俗学者を育てた渋沢敬三（1896～1963）の没後50年にあたり、各地の博物館でこれを記念する企画展等が開催された。

・渋沢史料館／渋沢敬三没後50年企画展

「祭魚洞祭」（2013.8.25.～11.24.）

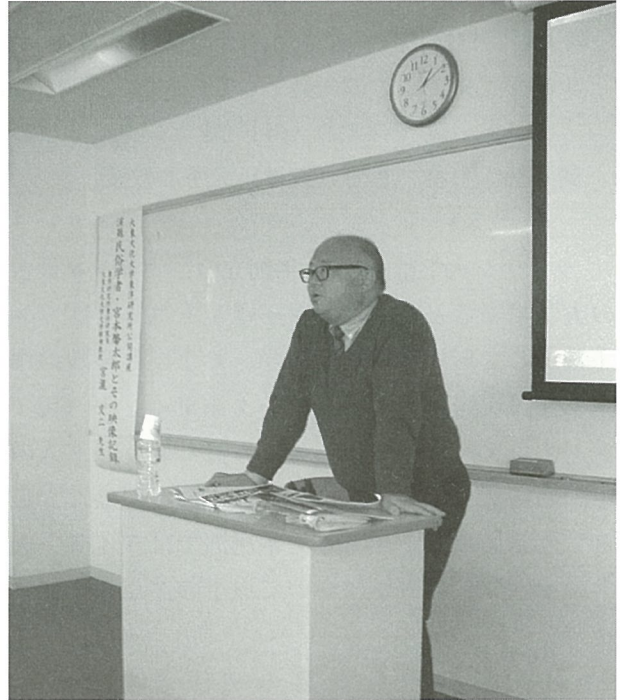
・国立歴史民俗博物館／歴博映像祭

「映像民俗学の先駆者たち／渋沢敬三と宮本馨太郎」（2013.11.17.～11.24.）

・国立民族学博物館／特別展「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館」（2013.9.19.～12.3.）

渋沢は、公務の間を縫って民俗学研究に勤むとともに、数多くの民俗学者を育てたが、立教大学名誉教授の民俗学者・宮本馨太郎（1911～1979）もまた、その一人であった。とりわけ宮本は、旧制中学に入学した大正14年頃（15歳）からフランス製の9.5mmカメラ「パテーベビー」を用いた映像制作に取り組み、昭和初期からは、今日では一般的となっている映像による各地の習俗の記録化を逸早く試みている、現在、その作品群は高く評価されており、各地で上映会の開催が相次いでいる。

今回紹介した16mm映像「台湾高雄・パイワン族の暮らし」（昭和12年撮影）は、当時、日本の植民地地下にあった台湾先住民の暮らしを渋沢の命を受けて記録した貴重な映像であり、単なる一民族の映像記録にとどまらず、今では失われてしまった日本人の生活の一端をそこに見出すことが出来る貴重な映像である。縦杵と臼を用いた脱穀作業の風景は、銅鐸の意匠にも描かれた弥生時代の米の脱穀作業を彷彿とさせるものであり、紡錘（つむ）を用いた糸紡ぎや地機（じばた）織りの様子も、弥生時代のそれを見ているかのようであった。また、急峻な山の斜面を用いた棚田の景観は、日本のそれを凌駕し圧巻であった。



宮本馨太郎の遺した映像記録は、今回上映した作品に限らず多岐に及んでいる（その詳細は宮本記念財団のHPを参照されたい）。その本格的な（学術的な）分析・活用は、今まさに始まったばかりであり、今後、これらの映像記録を活かした豊かな研究成果が生まれていくことを期待したい。今回の講演が、その一助となれば望外の喜びである。

◇第3回 11月21日(木) 13:00～15:00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：ヨーロッパにおける茶文化の誕生と女性たち

講師：滝口 明子（東洋研究所兼坦研究員，大東文化大学准教授）

茶はもともと中国を中心とする東洋の飲み物で、日本でも古くから親しまれてきた。欧米では、17世紀初め、オランダ東インド会社による日本茶と中国茶の輸入開始をきっかけとして、茶の飲用が始まった。およそ400年前のことである。

今回の講演では、おもに17～18世紀ヨーロッパにおける茶文化誕生の歴史をたどり、その特色について考察した。アジアの茶は、どのような過程を経てヨーロッパで受け入れられたのか。欧米の茶文化は、中国や日本の茶文化と比較すると、どんな共通点や相違点を持っているのか。とくに女性たちの役割に注目しつつ、茶を描いた詩文や絵画を紹介した。

まず17世紀のオランダ絵画（日常画）を見ると、ワイン・グラスや果物などが豊かさの象徴として描かれることはあっても、お茶を飲む人々の様子を描いたものは比較的少ない。一方、同時期のフランスの貴族や高位聖職者のあいだでは、薬効あるものとして茶が流行していたため、宮廷侍医の本の挿絵などに茶道具の絵が見られる。

イギリスでは、茶は18世紀初め頃から市民階級に流行し、18世紀半ばには次第に庶民にも手の届くものとなり、急速に普及する。1800年前後には「国民生活の必需品」と見なされるほどになった。このイギリスにおける茶の大流行と茶論争、喫茶習慣の定着、そして茶文化の誕生は人類史上稀に見る、きわめて興味深い現象と言える。異文化からの贈り物であった「アジアの葉」Asian Leafは、18世紀の100年間にイギリスの国民飲料となり、さらに19世紀から20世紀にかけてヨーロッパ諸国の植民地拡大に伴って「アジア発の世界飲料」となっていく。ティーポットを用いる欧米の紅茶文化は、日本を含むアジア諸国にも逆輸入され、それぞれの地域で多様な文化を生み、今日に至っている。

最後に、イギリスおよびヨーロッパの茶文化は、一家の主婦（Mother）がつかさどる儀式という側

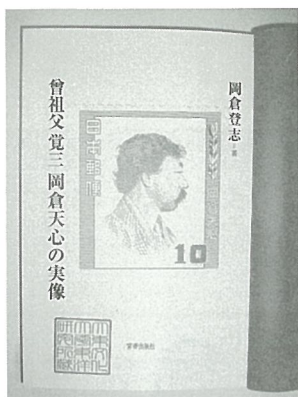


面を持ち、とくに17～18世紀初期の喫茶図からは、日本の茶の湯などともよく似た、厳かな雰囲気さえ感じられる。これは、コーヒーやココアなど、ほぼ同時期にヨーロッパの食卓に登場した他の飲み物と比べて、大きく異なる点と言える。テーブルで女主人が客人あるいは家族のために、自ら茶葉を扱い、茶を淹れる過程を取り仕切るという点は、ヨーロッパ茶文化の大きな特色となっている。さらに茶が人気を集め一般化する1730～50年代の絵画を見ると、絵の雰囲気も多様化し、一人でお茶を愉しむ女性や職人（彫金師）たちの気楽なお茶会なども描かれている。ヨーロッパの人々が日常生活の中で、それぞれの暮らしに応じたやり方で、茶を愉しんでいた感じが感じとれる。

私たちの身近な飲み物である茶をとおして、世界の文化や文明の歴史と未来に思いを馳せ、現在の日本文化について再考することは、面白く意味深いことではないだろうか。

〔研究員の著書紹介〕 岡倉登志著『曾祖父覚三 岡倉天心の実像』

東洋研究所教授 山田 準



『曾祖父覚三
岡倉天心の実像』

岡倉登志著
宮帯出版社発行
2013年10月刊

著者はタイトルからも分かるように岡倉天心の曾孫にあたり、本学名誉教授、当研究所兼任研究員として、研究部会「西欧植民地主義再考」と「岡倉天心（覚三）にとっての「伝統と近代」」に参加されています。歴史学者であり直系の著者がまとめた実像は最も信頼おける伝記といえよう！研究者にとっては必読書である。序は「美術界巨星の死 1913.9」から始まって本文8章に分けて時代ごとにまとめられている。略年譜、参考文献等が付けられている。

〔研究員の著書紹介〕 岡倉登志・岡本佳子・宮瀧交二著『岡倉天心 思想と行動』

東洋研究所教授 山田 準



『岡倉天心
思想と行動』

岡倉登志、
岡本佳子、
宮瀧交二著、
吉川弘文館発行
2013年7月刊

3名の著者の内、岡倉登志については上記に書いた通りであるが、岡本佳子は当研究所兼任研究員として、宮瀧交二は本学文学部准教授で、当研究所兼任研究員として、研究部会「岡倉天心（覚三）にとっての「伝統と近代」」に所属されている。序章「天心岡倉覚三研究の足跡と課題」、第1章「岡倉天心と万国博覧会」、第4章「ボストン・ニューヨークでの岡倉天心」、第5章「岡倉天心と明治の文豪」を岡倉が、第2章「日本博物館史の中の岡倉天心」を宮瀧が、第3章「ベンガルの民族主義と天心岡倉覚三」と各章の最後にあるコラムを岡本が担当している

〔研究員の著書紹介〕 『知らなかった！もっと知りたい、大安寺』

2010年11月7日開催 仏教文化の源流 大安寺国際シンポジウム全記録』

東洋研究所教授 山田 準



『知らなかった！
もっと知りたい、大安寺』
2010年11月7日開催
仏教文化の源流 大安寺
国際シンポジウム全記録』
SP プロデュース編集
南都 大安寺発行
2011年9月刊

この本は2010年11月7日、大安寺主催の「仏教文化の源流 大安寺国際シンポジウム」の全記録である。パネラーの蔵中しのぶは、本学外国語学部教授で、本研究所兼任研究員で研究会「茶の湯と座の文芸」の主任研究員である。イタリア国立サレント大学から参加のマリア・キアラ・ミリオーレ教授は本研究所兼任研究員でもある、大安寺について、仏教文化についてのよき案内書である。

【機関誌】

□東洋研究 第188号 (2013年7月30日発行)

田中 良明…北斗星占小攷

福田 俊昭…『朝野僉載』に見える酷暴説話 (前編)

岡崎 邦彦…西安事変前の中国共産党と蔣介石国民党

—「反蔣」から「逼蔣」への転換と国共合作交渉の決裂—

由川 稔 …モンゴル国経済のマクロ的分析

～モンゴル国経済のマクロ的概況と日本・モンゴル両国関係の基本的方向～

松本 照敬…ラーマヌジャ思想の研究 (10)

□東洋研究 第189号 (2013年11月25日発行)

中村 聡 …19世紀中国における改革論の段階的変化と在華宣教師

篠永 宣孝…第一次大戦期の中国興業銀行の発展と変容—事業銀行か預金銀行か—

鏡屋 一 …現代中国における「歴史」の再生—音楽舞踏史詩『東方紅』の場合—

嶋 亜弥子…農村女性リーダーにみる職業訓練の役割—北京市実用技能訓練学校の事例—

柴田 善雅…「満州国」における日系証券会社の現地化

□東洋研究 第190号 (2013年12月30日発行予定)

小坂 眞二…六壬式占の十二籌法と陰陽道 (二) —神事占の占定占を中心として—

濱 久雄 …根本羽嶽と信夫恕軒との易学論争

細井 浩志…国立天文台本『天文要録』について—旧内閣文庫本の再発見—

高橋 康浩…繆襲「魏鼓吹曲」について

渡邊 義浩…諸葛亮の外交政策

□東洋研究 第191号 (2014年1月25日発行予定)

大谷 光男…太歳庚寅銘の鉄製大刀について—2011年9月 福岡市西区元岡古墳 (群G6号墳) より出土—

安保 博史…蘇東坡と芭蕉

相田 満 …日本の惜字文化

石井 寛治…両大戦間期における日本ブルジョアジーのエートス—軍縮会議と満州事変への対応—

齋藤 俊輔…ディアゴ・ド・コウトのポルトガル帝国論—『老兵との対話 (第一の書)』を中心に

林 裕 …紛争影響下社会としてのアフガニスタン農村部

—アフガニスタン・カブール州北方郡部を事例として

【刊行図書】

□藝文類聚 (巻87) 訓讀付索引 (2014年2月28日発行予定)

B5判 東洋研究所兼担研究員 中林 史朗 (代表) 他8名共著

□『茶譜』巻6 注釈 (2014年3月25日発行予定)

B5判 東洋研究所兼担研究員 藏中 しのぶ他著

□『岡倉天心—伝統と革新』 (2014年3月25日発行予定)

B5判 東洋研究所兼任研究員 岡倉 登志他著

新刊案内



『藝文類聚』(巻86) 訓読付索引

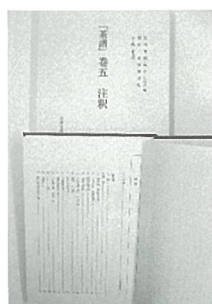
大東文化大学東洋研究所「藝文類聚」研究班 代表 福田 俊昭

2013年3月19日発行／B5判 136頁／ISBN 978-4-904626-12-2／頒価¥5,000 (税別)

『藝文類聚』は中国の類書の中でも早い成立に属する類書で、日本文学への影響は計り知れないものがある。本書はその『藝文類聚』を巻ごとに訓読文を施し、四部叢刊に採録されている作品については校異を付し、最後に利用者の便を考えて重要語彙索引を掲載したものである。

巻86は、「菓部上」の李 桃 梅 梨 甘 橘 櫻桃 石榴 柿 榧 柰 李 桃 梅 梨 甘 橘 櫻桃 石榴 柿 榧 柰 を収録している。

《既刊》巻1～巻16, 巻80～巻85



『茶譜』巻5 注釈

藏中しのおぶ・福田 俊昭・相田 満・安保 博史・矢ヶ崎 善太郎共著

2013年3月21日発行／B5判 353頁／ISBN 978-4-904626-13-9／頒価¥9,000 (税別)

『茶譜』全18巻は、茶道流派の生成がきざし始めていた寛文年間(1661～1673)頃の成立とされ、茶道全般におよぶ総合的な類聚編纂書である。各項目について、千利休流・小堀遠州流・古田織部流・金森宗和流等、流派のちがいを対照的に提示しつつ、茶の湯や茶室にかかわるさまざまな記事を類聚編纂した茶道百科事典ともいべき性格を備えている。

《既刊》巻1～巻4



『新書校補』 帝紀 (一)

渡邊義浩・高橋康浩 編集

2013年3月10日発行／A5判 277頁／ISBN978-4-904626-13-9／頒価¥5,000 (税別)

二十四史の一つに数えられている『新書』は、唐代の編纂にかかるもので、史料的に偏向が多いと言われている。『新書校補』は、『新書』の史料論的研究の基礎を構築するため、『新書斟注』および「十八家新書」や『資治通鑑』を利用することにより、校補本の『新書』を作成したものである。

この他の東洋研究所刊行物についてはホームページをご覧ください。

刊行図書取扱店

■汲古書院

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 2-5-4

TEL (03) 3265-9764

■池上書店 (大東文化大学板橋校舎内)

〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1

TEL (03) 3932-7567

■進明堂 (大東文化大学東松山校舎内)

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿 560

TEL (0493) 34-4430

大東文化大学東洋研究所所報 No.60

2013年12月25日発行

編集・発行 大東文化大学東洋研究所

〒175-0083 東京都板橋区徳丸 2-19-10

TEL (03) 5399-7351 FAX (03) 5399-8756

E-mail : tokenji@ic.daito.ac.jp

URL <http://www.daito.ac.jp>

印刷 (株) 東京技術協会